

# まちは散歩でつくられる

岡野裕行

## 1. 連携の新たな論点

今回の特集では「図書館と文学館の連携」という執筆テーマをいただいている。思い返してみると、筆者は同一タイトルの文章を他誌の特集記事として2011年に発表したことがある<sup>1)</sup>。10年前の文章を読み返すと、筆者は図書館と文学館の連携について、①文学館の施設・設備、②文学館が収集対象とする資料、という二つの観点からそれぞれを充実させることの重要性を述べている。本稿では三つ目の論点として、文学散歩という主題について考えてみたい。

## 2. 図書館と文学散歩

文学散歩という取り組みをその発祥時点まで歴史を遡ると、詩人で編集者の野田宇太郎（1909～1984年）が、1951年に『日本読書新聞』紙上で「新東京文学散歩」の連載を開始したことがきっかけであることが確認できる<sup>2)</sup>。今日に至るまで70年ほどの歴史を有するが、もともとは大空襲の戦禍によって大きく変貌してしまった東京の風景を記録に残すために構想された取り組みである。文学散歩には失われてしまいそうな風景を言葉として残そうとする野田宇太郎の強い思いが込められている。しかし、今日における文学散歩のイメージは、まちなかに点在する文学にゆかりのある風景を参加者同士で緩やかに楽しくめぐり歩き、案内人の話を聞きながら見識を広めるというイベントの形が一般的だろう。考案者の野田宇太郎が当初意識していた方法とは異なる形で、文学散歩は世

の中に普及してしまったのである。

具体的な取り組み事例としては、「文学散歩友の会」などの名称を掲げた市民団体が主催するものがある。たとえば野田宇太郎が編集・発行していた雑誌『文学散歩』（1961～1966年）には、全国各地の「文学散歩友の会」の動向が寄せられており、各地域への広まり方を推測することが可能である<sup>3)</sup>。また、『学校図書館』誌上でも文学散歩の実践事例が紹介されるなど、学校教育の一環としても注目されていたことがわかる<sup>4)</sup>。日本文学の課程を持つ大学においても、学生たちに対する学びの機会の一つとして定期的実施されていることが多い<sup>5)</sup>。そしてまた、過去の『図書館雑誌』誌上に全国図書館大会の開催地の文学散歩が紹介されているように、図書館でも積極的に実施されている<sup>6)</sup>。

以上のようなイベントとしての実施だけでなく、たとえば三鷹市立図書館編『三鷹文学散歩』（1990年）や大宮市立西部図書館編『大宮文学散歩：ふるさとと面影』（1991年）など、公共図書館が周辺地域の文学ゆかりの風景を図書資料の形態で記録に残していく文学散歩の用例もある。文学館においても、たとえば神奈川近代文学館編『湘南の光と影：神奈川文学散歩展』（1988年）、鎌倉文学館編『鎌倉文学散歩：大船・北鎌倉方面』（1994年）、青森県近代文学館編『東青文学散歩：特別展』（2001年）など、文学散歩を展覧会のテーマとして設定し、図録まで発行する事例が確認できる。

### 3. 文学散歩とウィキペディアタウン

筆者はこのように文学散歩の取り組みが図書館サービスの一環として普及している背景について、①公共図書館において地域資料の積極的な収集・保存・活用の動きが強まっていること、②地域資料の積極的活用を観光の視点から進めていること、③地域の文化情報資源の記事を更新し合うウィキペディアタウンの取り組みが実施され始めたこと、という三つの点を指摘している<sup>7)</sup>。また、同論文のなかで、文学散歩を以下の三段階の発達過程に分けて考えてみるという提案も行っている。

- ①個人の手によってまちの文学情報を記録に残すもの。紀行文学と呼ばれる文学作品につながる（第一の文学散歩）。
- ②参加者同士でまちをめぐる歩くイベントとして開催し、文学情報を活用するもの。文学を題材とした案内記やガイドブックと呼ばれる図書の発行につながる（第二の文学散歩）。
- ③説明の根拠となる出典を明確にしなが、まちの文学情報を調べてウェブ上で共有化するもの。ウィキペディアタウンと呼ばれる編集イベントにつながる（第三の文学散歩）。

文学散歩は一見すると身体を動かして「歩く」ことを重要視した取り組みのように思える。しかし、それは文学散歩の持つ機能のある側面しか見ていないことになる。前述の論考でも指摘しているように、文学散歩とは「歩く」「書く」行為の先に、私たちが文学を「語る」ための機会をつくろうとする取り組みである<sup>8)</sup>。つまり文学散歩とは、まちの文学情報について、参加者が自らの言葉で表現する機会をつくり出そうとするものと言える。

### 4. 図書館における文学という主題

影山亮は文学館・記念館の社会的な役割について、自らが勤務するさいたま文学館を事例とし、人気ゲーム『文豪とアルケミスト』の影響によって来館者が増加したという実績から、文学に興味を抱く利用者の増加という効果があったことを指摘する<sup>9)</sup>。影山はそうした新しいタイプの来館者

を文学の「担い手」と呼び、その人たちを増やすことが重要だと指摘する。

「担う」ということは、文学について自らの言葉で語る力があると期待されることでもある。文学史上の重要な作家・作品の「担い手」となることは確かに重要だろう。しかし、図書館における文学という主題は、いわゆるプロの作家が書き残してきたような、文学史にも名前が残っているような作品のみを対象とするものではない。図書館と文学館の連携で想定している文学とは、相当に幅の広い主題であるはずである。

ここで図書館が文学という主題をどのように捉えてきたのかを考えてみたい。『日本十進分類法』において、文学という主題は9類に置かれている。そのなかでも特にコレクションの数が多く、もともと需要のある分野は913（小説・物語）や914（評論・エッセイ・随筆）の主題だろう。

しかし、文学散歩という取り組みを視野に入れるならば、915（日記・書簡・紀行）や916（記録・手記・ルポルタージュ）という記録類がより重要となるだろう。なぜならば、そのまちに暮らす普通の人たちの視点による生活に密着した言葉が残されるのは、915や916に該当すると考えられるからである。文学とは私たちの暮らしから離れた特別なものではない。私たちの普段どおりの暮らしこそが文学である。私の生きてきた歩みの記録も、あなたの日々の生活の息遣いの記録も、図書館においてはすべて文学として扱われる<sup>10)</sup>。

町田市で開催された文学散歩に車イスで参加した堤愛子は、まちを見歩いた景色に驚くと同時に、自分の足で歩かずに移動ができたことへの喜びも語っている<sup>11)</sup>。文学散歩は「歩く」だけではなく、「語る」力も生み出す。文学散歩という取り組みにおいては、普通に暮らす人たちの息遣いを身近に感じられることが重要となる。私たちは何気ない日常を送るだけでも、文学と呼ばれる存在になりうるのである。

## 5. 文学アーカイブとは詩である

前述の論考のなかで筆者は、「自分たちのまちに関する出来事をどのようにながめるのか」という問題意識は、読者である私たち側にあることを指摘している<sup>12)</sup>。「ながむ」という言葉は「眺む」(物思いにふけりながらぼんやりと見やる)と「詠(ながむ)」(声を長く引いて詩歌を口ずさむ)の両方の意味で取っておきたい。風景を「眺める」ことはその風景を言葉にして声に出して「詠(よ)む」という行為と近い。普段の何気ない生活のなかで私たちは無意識に身近な風景を眺めている。そしてそこで見たさまざまな風景を言葉にして口ずさんでいく。

そこで口をついて出てくる言葉は、一から十まですべてを自分自身の言葉として表現する必要はない。古くから伝わる和歌や俳句を口ずさむのも良いし、有名な近代文学作品の一場面を思い起こすのも良い。どこかの誰かが発表し、私たちの生活に馴染んでいる言葉を口にしてみるのも良いだろう。誰かがつくった流行りの歌を口ずさむだけでも、それは十分に文学的な行為である。

まちなかに建立された文学碑・句碑・歌碑などは、私たちがその場所の風景を言葉にして口ずさむ作業を助けてくれるだろう。古い時代の和歌や俳句も印象的だが、たとえば2007年には、森高千里の名曲「渡良瀬橋」の歌碑が栃木県足利市に建てられていることが話題にもなったように、現代の歌のほうが私たちの生活にとって身近なのかもしれない。身近な風景を眺めつつ、それを口ずさむことができる生活はとても豊かである。

文学散歩を考案した野田宇太郎はもともとは詩人として出発している。文学散歩が生み出された背景には詩の心がある。創作の心がある。文学アーカイブとは詩である。文学散歩はまちのなかを見歩くだけのものではない。文学散歩とは文学を端緒としてまちを語るものである。口承されている歌の一節でも良い。普通の人々が生活の風景を見て、それを言葉にして歌うということ。日常にある言葉が豊かであること。私たちの豊かな生

活を形づくるものはそういった言葉だろう。

図書館と文学館の連携というものが目指すべきところは、私たちがまちをめぐり歩き、まちの風景を眺め、まちの風景を言葉にして歌うことを勧奨するものではないだろうか。文学は読むことだけがすべてではない。まちを自分の足で歩き回り、まちの風景を言葉にして口ずさむ。その言葉がそのまちの人たちの共有物として定着したならば、自分が口ずさんだその歌が、もとはいったい誰の声だったのかを知る必要もなくなるだろう。

## 6. まちの言葉はみんなの言葉

図書館と文学館の連携には、普段の暮らしのなかで心に思い浮かんだ出来事を言葉にすること、声を張り上げること、そういう状況を支えていくことが期待されているのだと思う。図書館や文学館というのは、文学を「見る／読む」場所であると同時に、文学を「語る／詠む」場所でもある。そこでは、文学が「読む」から「詠む」へと変わっていく体験もできるだろう。

それならば声を張り上げて歌を歌ってみたい。自分の見た風景を言葉にしてみたい。感じたことを歌い上げてみたい。私たちは歌を詠まない詩人ではなく、命ある限り誰もがまちについて語る詩人である。まちの風景をあなたが言葉にすることは、そのまちに暮らすみんなのための言葉をつくり出すことでもある。それは自分の住むまちの風景を眺め、自分の足でその場所を歩いてみることからじまるだろう。あなたが歩いた後ろにはまちの言葉が轍となって残り、あとに続く人がその痕跡をたどっていくことになるだろう。

私たちには自分の暮らすまちについて語る言葉を紡ぎ出す力がある。それは文学というものが私たちに与えてくれる力の一つである。言いかえれば、それは詩を書く行為と呼ぶにふさわしいものである。まちに暮らす私たちは誰もがのおのの生きている時代における詩人の一人である。詩人としての野田宇太郎が東京のまちを歩いて書き残そうとしたことから文学散歩が生まれ出たように、

私は私が見たまちの風景を、あなたはあなたが見たまちの風景を語り残してみたら良い。みんなで私たちが暮らすまちの言葉を語り残してみたら良い。まちの言葉はみんなの言葉である。図書館や文学館はそのための力と言葉を私たちに与えてくれる。

本稿の最後に、岩瀬崇氏の「生に詩を織り込む」という文章の一部を引用したい<sup>13)</sup>。

幼児期における詩的な体験の記憶、及び世界との関わり方を想い出す装置として、芸術作品や美術館が果たす役割は大きい、そのみに傾斜した活動には矛盾点が多に多い。

そういった中で、私が思案しているのは、「詩」が生存条件となっている暮らしの実現。「祈ること」「自然に身を預けて生きること」「(自然・他者の) 声を聴くこと」「(自然・他者と) 調和していること」でしか日常生活が成り立っていかない暮らし。そのような暮らしが成立した空間が、人類史上に存在したのかは定かでない。

しかし確かなことは、何人の生にも「詩」が織り込んでいけるような社会が構築出来たならば、それは日常の芸術化、生活の芸術化の成立を意味し、芸術を真に公共のものとするようになるだろう。根源的な生命活動がそこでようやく成立する。

さらに言えば、そのような社会や暮らしの追求と「持続可能な社会の実現」は軌を一にしていると私は思う。

この文章では芸術作品や美術館という用語が登場するが、これらを文学作品や文学館と置き換えてもその趣旨は十分に伝わるだろう。私たちが文化情報資源に触れるための社会的装置として、図書館や文学館の役割は重要だが、私たちの生きる時間の大部分は日常の生活／普段の何気ない暮らしである。そこに「詩」が織り込まれることで、私たちの日常は芸術の舞台となりうるのである。

あなたはまちを歩く。あなたの暮らすまちの風景が見える。あなたはその風景をぼんやりと眺め

ている。あなたはその風景をはっきりと眺めている。あなたがそのときの感情を言葉にすれば、私もあなたの心に寄り添える。私もあなたの視点に立つことができる。「あなたのために声を張り上げて歌うよ」「君の歌う声が響くよ」、このまちに暮らす人たちがそんな気持ちで日々を暮らしていけたなら、それはとてもすばらしいことだろう。

#### 注

- 1) 岡野裕行「図書館と文学館の連携（特集＝図書館にできること：周辺との連携を中心に）」『情報の科学と技術』第61巻第6号、2011年6月、pp.233-237.
- 2) 野田宇太郎による文学散歩の実績は、『野田宇太郎文学散歩全28巻』（文一総合出版、1977～1985年）に結実する。
- 3) 岡野裕行「野田宇太郎と雑誌『文学散歩』総目次」『皇學館論叢』第54巻4号、2022年1月、pp.137-154.
- 4) 1966年に渡辺守順が「文学散歩：学校図書館行事の計画と実践」（第187号）を、1977年には斎藤弘子が「図書委員研修と文学散歩」（第321号）を『学校図書館』に寄稿している。
- 5) 大学の公式行事として文学散歩を行っている事例もあるが、青山学院大学のサークル「文学散歩の会」(<https://twitter.com/agubunsan>)のように、学生主体での課外活動としている例も見られる。
- 6) 1985年の宮城大会における「仙台文学散歩」（第79巻9号）、1991年の徳島大会における「徳島文学散歩：近・現代を中心に」（第85巻8号）、1995年の新潟大会における「佐渡島の歴史と文学散歩」（第89巻10号）などが『図書館雑誌』に寄稿されている。
- 7) 岡野裕行「三つの文学散歩：野田宇太郎からウイキペディアタウンへ」『日本近代文学』第106集、2022年5月、pp.160-175.
- 8) 前掲7.
- 9) 影山亮「文学館・記念館の役割（キュレーション）」『昭和文学研究』第85集、2022年9月、pp.175-177.
- 10) 岡野裕行『文学を旅するには？（皇學館大学講演叢書第167輯）』皇學館大学出版部、2018年3月、90p.
- 11) 堤愛子「車イス文学散歩：私のスケッチ⑭」『障害者と雇用』第50号、1985年7月、p.29.
- 12) 前掲7.
- 13) 岩瀬崇「生に詩を織り込む」『詩と共生』いわせ書房、2015年、pp.10-11.

（おかの ひろゆき：皇學館大学文学部）  
[NDC10：906 BSH：1.文学館 2.図書館]